

# 上島の文芸

## 水曜会【弓削】

初蝶の白ふりまきて去り行きぬ

今年又花見できたる嬉しさよ

春光を錐搦みしつゝ渦流る

真つ直ぐにつかぬ足跡浜うらら

童心にかえり虎杖嚙み歩く

春潮の香よ故郷の母の文

菜の花を貰ひ重ねてお裾分け

亀島 一美

小林しぐれ

田坂 紫苑

田坂美代子

中本砂恵子

中脇 幸造

森本 恵子

## 生名短歌会【生名】

群れ咲きしスモモは実らず春は逝く蝶々の来ない庭は淋しき

綿雲の東にゆつくり流るるを追うがに歩く妻と浜道

不況の嵐「就職決まったよ」の孫の声肩の力がストンと落ちる

八十歳の歲月過ぐる要注意医師の言葉に横着の日々

村上 宗子

村上 司

村上 昌子

渡辺スズ子

コーヒーふたつメロンパンも二つに分けて桜咲く日に逝きたる友と

彼の人はあまたの花に包まれて容赦もあらず旅立ち逝ける

満開の花見に足らいて山下り石の根っこに春蘭見つける

故里の岩城の山に花咲けど医に通う身の思い叶わず

薄紙をはぐごと友の死遠くなる花好きなりし医者嫌いなりし

## むつみ歌会【岩城】

思ひ遣り深き愛媛の加戸知事のさくら愛でし句碑積善山に建つ

動かざる右手右足復活のリハビリ励む従兄弟に拍手

花粉症知らざりし頃思ひ出す牛を飼ひつつ杉鉄砲飛ばす

久々の友の見舞ひもまた楽し話はずみて時を忘るる

生口島の山遠目にも白く見え台風並の吹雪となりぬ

大地震の「いわき」にダイヤル繰り返す今だに無事の確認とれず

人間の嘔吐の如き声あげて青鷺は翔ぶ棧橋の上

浜田伊勢子

村上優美子

岡野三重子

池田 友幸

池田 繁雄

池本 正子

池本 正子

白石 勇

高本 久子

浪本 綾子

西本 優子

森本 和佳

賜はりしわらびのあくを抜きてをり厨に春の香りみちくる

## 魚島俳歌柳会【魚島】

歩け歩け尻をたたいた弟よ一人の旅立ちどこへ行ったか

鈴蘭の花の日差しを呼び集め庭の藤小粒の薔びつしりと

被災地の早き復興祈る花

被災者よ頑張れみんな応援す

懲りごとと言いつつ孫に会いに行き退職後職業欄へ「主夫」と書く

パソコンは惚け防止だと謙遜し妻よりも一日先にと墓洗う

花の積善にしまなみ一望す

花時の乗物に酔ひ人に酔ひ

想定外地震災津波に原発が

福島が世界の原発見直させ

宮本佳世子

三上 運

大黒 丸

大船 近義

佐伯 真柳

城山 登

柳 小福

松原 瑞峰

## クリーンセンターからお願い 燃えるゴミの中に 不燃物を入れないで！

燃えるゴミの中に金属類が混入されていくことがあります。金属類の混入は機器の損傷等につながり、施設の寿命を短くしてしまいますので、今後、燃えるゴミの中には、金属類等の不燃物は絶対に入れないでください。

# かみじま歴史探訪

シリーズ・史料が物語る郷土の歴史③

## 伊能忠敬の芸予諸島の測量



伊能忠敬  
(伊能忠敬記念館蔵)

伊能忠敬(一七四五―一八一八)は、幕末に来日した西欧人の「碧い目を白黒させた」(井上ひさし『伊能忠敬』『人物海の日本史』⑦、毎日新聞社)ほどに精密であった『大日本沿海輿地全図』の産みの親です。

第十次までの測量のうち、第九次と十次を除くすべてが伊能忠敬によって推進されています。その第五次(文化三、一八〇六年)、山陽路(瀬戸内海沿岸)の測量の際に上島諸島の実測もされました。第五次から幕府直轄の事業とされ、伊能は幕臣になっていました。受け入れ側の庄屋たちは緊張していたに相違ありません。

岩城の「史料館」には、二綴りの関係史料(『岩城村誌』上巻、古代・中近世史編、所載)が保存されています。その一冊目の綴りの表紙には、上島の測量が実施される前年の文化二(一八〇五)年丑十一月と記載されています。その『測量御役人御通行諸日記』の最初には「讃州(香川県)、予州(愛媛県)ナドノ島々ニテモ、中国筋島続キニテ測量都合宜シキ所ハ此ノ度相測り候」と、庄屋たちは測量に近いことを予知しています。

測量に備えて芸予諸島の庄屋たちは藩の境を超えた対応が必要となり、芸州藩(広島県)の因島の大

庄屋宮地惣二郎とも連携して、はるかに播磨(兵庫県)の高砂まで使者を派遣して実施状況を確認しています。また、同じ伊予でも藩が異なっていた弓削(今治藩)と岩城・生名(松山藩)は共に情報交換を進め、文化二年の十一月十四日付けで、弓削から岩城に次のような文書が出されています。

松山御領岩城島 御庄屋 白石友右衛門様  
：書状到来ニ付、(因島)三ノ庄惣二郎方へ濱納屋三郎兵衛、聞キ合セノ為、早速差シ遣ワシ  
：今治領大庄屋 下弓削村 村井小左衛門  
測量は因島から伊予側の弓削・生名・岩城と進められていきます。伊能忠敬の第五次『測量日記』には次のように詳細な記録が見られます。

〔文化三年〕二月九日、：(因島)重井浦出立：田熊浦まで測る。：同十日：今朝、今治領の島々へ渡海せんとす、一手は高橋、佐藤、宗兵衛、江島を測る。二手は坂部、稲生、浅五郎、丈助、沖ノ島、瓢箪小島を測る。三手は下河辺、永沢、丈衛門、栄二、高井神島を測る。四手は東河、小坂、吉平、半六、百貫島、豊島を測る。：止宿弓削島、下弓削浦大庄屋村井小左衛門。此の処よき湊なり：同十四日朝曇晴。六ッ頃下弓削出立。高橋、平山(今日より出勤)：三番手にて生名島(松平立丸領なり、此島二属スル、厳島、ノウコ、ツボケ島、ツル島、竹島、ヘナイ島、コシキ島、大コ島、ジジカセ島、合九島)。高松岬より初。：一番：赤穂根島、津波島、外鷗小島等を測る。三手共七ッ前後に伊予国越智郡岩城村に着。止宿は庄屋孫左衛門：同十五日、朝より晴天、六ッ前後岩城島出立、三手に分かれて、一手は：生口島：洲江浦より始める。』

(佐久間達夫校訂『伊能忠敬測量日記』)  
大人数の測量隊の受け入れは、大変でした。二冊目の『測量方御役人様御通行諸日記』(表紙に文化三年寅正月と記載)には次のように詳細な指示が見られます。

一、御役人中、其ノ外付々ノ衆中御宿手当ノ事  
一、六七端船 五六艘 但シ御見分ノ節、御乗船並ビニ台所船用意  
一、小舟 四拾艘程  
一、人足 九拾人程

一、道橋ノ儀大破ノ所ハ夫々取締ウ事  
(中略)  
一、臥具(寝具)、絹、紬、木綿  
一、入湯桶、此ノ品コレ無ク候ハバ居風呂ニテモ綺麗ナル所用意

伊能の配下として、測量に従事している高橋は、幕府天文方高橋至時の次男・高橋善助。その兄の高橋景保(のち、シーボルト事件に連座して獄死)と共に暦算や蘭学を学び、のち幕府天文方見習から御書物奉行に就任。坂部(貞兵衛)は、幕府の御手先同心出身で、高橋景保に学んだ人物。また平山(郡蔵)は、伊能忠敬の妻(達)の母親の実家、平山家の子息。永沢(藤治郎)は、上総国(千葉県)香取郡佐原村の出身で、測量術に興味があつて参加、のち病気で帰国。佐藤(伊兵衛)は元は伊能の使用人、のち従臣となる。小坂(寛平)は同国多古町中村の出身、俳諧の師匠等をしたこともあつた人物でしたが、品行をとがめられて文化三年に破門されています。測量隊員のなかには、こうした人物もいて、酒宴を強要する等、受け入れ側の庄屋たちの苦労話も語り伝えられています。

苦労の結晶の関係図面は、測量に付き添った諸藩の藩士たちにも内密にされた模様です。のち文政一(一八二八)年には、この地図をめぐってシーボルト事件も発生しています。伊能の地図が書庫から解放されたのは、幕府の崩壊以後です。でも、『大日本沿海輿地全図』には、芸予諸島も明確に位置づけられています。その測量の際に、要請にこたえて数十隻の舟艇を動かしたのは、私たちの先祖に相違ありません。日本の夜明けを漕ぎ寄せていたのです。



大日本沿海輿地全図より

弓削商船高専・岡山商科大学名誉教授  
上島町文化財保護審議会 顧問

村上貢 稿